

哲学を生活に活かし、人間力を磨く

人間会議

2014 夏

宣伝会議7月号別冊
2014年6月5日発行(年2回・夏冬発行)通巻30号

長寿国から健康長寿国へ
**予防医療で
変わる日本**

ての業務が存在するからである。

「介護旅行」を通じた課題解決

「健康を失った人々のQOLをいかに回復・向上させるか、そして、日本人全体の健康寿命をいかに延ばすか」という課題克服に取り組む2つの事例は、介護旅行のトップ企業「S P I あ・える俱楽部」の代表取締役社長・篠塚恭一さん（52）で

ある。

同社は、1991年創業で、資本
金は1億円。

バブル崩壊で、旅行業界が低迷
し、差別化の必要に迫られる中、添
乗員出身の篠塚さんが「かつて旅行
好きだった高齢者の方々に今一度、
旅の楽しさを味わつてもらいたい」
という思いで、1995年にこの分
野に飛び込んだ。

あれから約20年。高齢化の進行と
共に、運輸・建設・介護など様々な
分野から介護旅行ビジネスへの参入
が続き競争環境は激化。

しかし、「S.P.Iあ・える俱楽部」
は、日本における「介護ツーリズム」
のパイオニアとして成長を続け、
2013年には利用件数が400件
を超え、介護旅行取扱高も1億円に
達した。



SPI あ・える俱楽部の篠塚恭一代表取締役社長。

①「ご自身が旅に出たい」という希望を
持ち、その意思確認ができること
②「ご家族やそれに代わる方（日常生活
がわかる方）が同意していること
③主治医やケアマネジャーなど医
療・介護の専門家（日頃の介護状
況がわかる方）の許可があること
という『3つの確認』が取れる方
であれば、たとえ、最も重い「要介
護」でも参加できます。実際、ス
トレッチャーに寝たまま参加してい
るは風光明媚な観光地に遊び、温
泉につかり、美味しい料理に舌鼓を
打てた時の歓びは、まさに格別だ。
「もつともつと生きたい。そして、
また旅に出たい。そのために、日々
のリハビリを今まで以上に頑張る
う」

波及効果としての 『限界集落』問題対応

篠塚さんのこうした取り組みは、

①「ご自身が旅に出たい」という希望を

持ち、その意思確認ができること
②「ご家族やそれに代わる方（日常生活
がわかる方）が同意していること
③主治医やケアマネジャーなど医
療・介護の専門家（日頃の介護状
況がわかる方）の許可があること
という『3つの確認』が取れる方
であれば、たとえ、最も重い「要介
護」でも参加できます。実際、ス
トレッチャーに寝たまま参加してい
るは風光明媚な観光地に遊び、温
泉につかり、美味しい料理に舌鼓を
打てた時の歓びは、まさに格別だ。
「もつともつと生きたい。そして、
また旅に出たい。そのために、日々
のリハビリを今まで以上に頑張る
う」

る方もいます。

年代的には70代の方が最も多い
ですが、もちろん80代、90代の方々
も多数参加しています」

それも、国内ばかりではない。北
極圏での犬ぞり体験であれ、ヨー
ロッパ旅行であれ、状況が許す限
り、世界のどこへでも赴くことができるのだ。

「もう一度旅なんてできない」
と諦めていた人が、思いもかけず、消
思い出の地を訪ね、旧交を温め、あ
るいは風光明媚な観光地に遊び、温
泉につかり、美味しい料理に舌鼓を
打てた時の歓びは、まさに格別だ。
今、人々の意識も変容しているのだ
と思います」

うした思いに駆られる。

それまで、どちらかと言えば、消
極的に日々を過ごしていたような人
であっても、こうした旅や外出をき
つかけに、快活でアクティブな生活
を送るようになるというから、「希望
や目標を持つて」ということが、生
きてゆく上でどんなに大切かわか
ります。

「10年前であれば、こうした方々
が温泉宿などに泊まるとき、一般のお
客様が戸惑うこともありましたが、
ここ3年ほどで状況は大きく変わり
ました。日本が超高齢社会となつた
今、人々の意識も変容しているのだ
と思います」



水泳や犬ぞり体験も。「体験したい」という想いに最大限応える。

結果的に、別の社会課題の克服にも貢献するという。

一例を挙げるならば、各地で深刻化する「限界集落」問題。

最近は、地方の山間部などの「限界集落」において、高齢者向けに、

食料品・日用品のデリバリーサービスも徐々に始まっている。

しかし、篠塚さんは、「過疎地の孤独な高齢者には、むしろ『出かける楽しみ』を作つてあげることが大事なのです」と主張する。

たしかに、デリバリーサービスによって、生活上の利便性は一見高まるものの、結果として、それまで以

上に、高齢者の「引きこもり」を助長することになりかねないからだ。

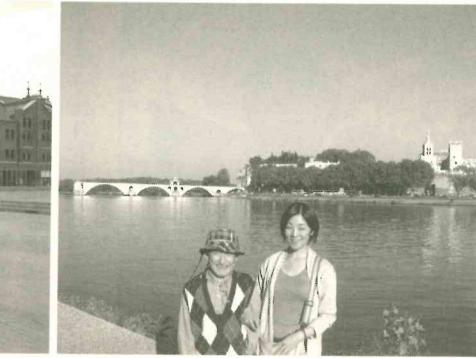
すでに述べたように、S.P.I.あ。

える俱乐部には、トラベルヘルパーが同行して、買い物や「人とのふれ

あい』をサポートする「お出かけ日和」というサービスが存在している。

そこで、これを活用して、限界集落の高齢者の方々に対しても、積極的に外出の機会を作つていこうという

ことである。



国内から海外まで、要介護者の旅行にヘルパーが付き添う。

要介護高齢者層の 「生きがい」創出をめぐる課題

以上、2つの先進的な事例を紹介した。

超高齢社会が本格到来した日本においては、今後も数十年にわたつ

えるならば、全体の実に4割近くが、年間200万円未満であることがわかる。

彼らは、この非常に限られた所にハイ・レベルな三幣さんと篠塚さんの事業は、社会的な支持・共感をベースに、拡大を続けてゆくに違いない。

10年間にわたつて親の介護を一

人で続いている筆者の個人的な思いから言つても、たいへん喜ばしいことである。

しかし、同時に、ひとつのが頭をよぎる。

厚生労働省のデータによれば、

日本の高齢者の世帯所得は、年間150～200万円未満が最多の12.5%を占める。100～150万円未満が12.2%でそれに続き、50～100万円未満が10.7%。それに0～50万円未満の2.4%を加

い。

そうなれば、勢い、歯科にかかることは後回しになりがちとなるし、ましてや、旅行や外出に回せる金銭的余裕は失われがちだ。

特に、要介護度が高まり、介護料金や医療費の負担が重くなるほど、その傾向は強くならざるを得まい。

日本の高齢者層の中で、最も高い比率を占めるこの層に対して、どのようにして、生きがい」を創出していくのか?



しまだ・ひでゆき
1956年福岡県生まれ。東京大学卒。大手エレクトロニクスマーカー、経営コンサルティング会社勤務を経て、文筆家として独立。自由が丘産能短大教員(経営学諸科目)。これまでに企業経営者など各分野のトップランナー600人を取材。単行本を7冊刊行したほか、新聞・雑誌などの連載多数。